人文知コミュニケーター座談会

連載「くらしに人文知～コロナ時代を生き抜く」に向けた問題意識とテーマに関するブレインストーミング

日時：2020 年 4 月 28 日（火）15:00 ～ 17:00
オンライン参加者：
〔人文知コミュニケーター〕
河合　佐知子　　国立歴史民俗博物館 / 日本中世史、女性・ジェンダー史、女院研究、前近代温泉文化史研究
粂　汐里　　国文学研究資料館 / 15 ～ 17 世紀の日本の語り物文芸（幸若舞曲、説経、古浄瑠璃）
金　セッピョル　総合地球環境学研究所 / 文化人類学、日本と韓国の死と葬儀に関する研究
大石　侑香　　国立民族学博物館 / 文化人類学、シベリア・北極域の生業研究
〔総合情報発信センター研究員〕
堀田　あゆみ　　人間文化研究機構 / 文化人類学、モンゴル研究

新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）によって引き起こされた「危機」に際して、人文学の研究者は何をすべきか。また、研究と社会をつなぐ人文知コミュニケーターに今できることは何か。そういう問いから、人文知コミュニケーター初の共同企画「くらしに人文知～コロナ時代を生き抜く」の連載を始める運びとなりました。人文知コミュニケーター独自の眼差しで、人間文化研究機構内外の研究者との対談や、関係者のインタビューなどを掲載していく予定です。
第 1 回目の記事として、連載のコンセプトやテーマについて、自らの経験を交えながら率直に語り合った内容をお届けします。この議論自体が人文学の役割を考える小さな糸口になれば幸いです。

コロナ「危機」に当たって人文学の研究者は何をすべきか 生活者と研究者の視点から、人文知コミュニケーターが語り合う

（金）　昨今のコロナ事態にあたって、私もみなさんも、この社会を生きる一人の生活者として感じていることが色々あると思います。一方でわれわれは研究者でもありますから、それぞれの研究と関連して見えてきていることもあると思います。そういった、生活者と研究者の視点を併せ持つ立場から何かを発信していくべきなんじゃないかと思い、この企画を提案させていただきました。
個人的には、これまでの活動は映像を用いた取材や、多くの人が参加するイベント主催など、対面を前提とするものが多かったんですが、それができなくなってきた現状があります。そこで人文知コミュニケーターとして何ができるかを考えているうちに、この企画にたどり着きました。また、ようやく人間文化研究機構のほぼ全ての機関に人文知コミュニケーターが配置されたので、共同企画を通して何が生まれるかを試してみたいとも思いました。
ただ、自分一人の研究だけでは限界があるので、私たちがアクセスできる研究者にも話を聞いて、それをわかりやすい形にまとめて発信してはどうかと思います。もし、この趣旨に賛同していただけるのであれば、形式やコンセプト、扱うテーマなどについて話し合いたいと思います。

（粂）　企画の趣旨に関連してですが、コロナのような疫病の危機の混乱に紛れて、人文知をこれまで軽んじてきたことに対する批判や、人文学への予算配分に対する不満が新聞などに寄稿、投稿されるようになってきていると感じます。われわれのこれからの取り組みも、このコロナの風潮に付け込むように「人文知が大事だ」と言っているように捉えられはしないかという心配があります。なので、まずコンセプトを決めるのが大事だと思います。且つ高尚な立場から人文知の危機や人文知の必要性を叫ぶというのとはちょっと違う視点でやりたいですね。

（河合）　人文知というのは元々、人文学のみを指すのではなく、自然科学までも包含する「人間の知」だと堀田さんが教えてくださって、「ああ、そうか」と思ったんです。人文知コミュニケーターとして頑張っていくためには、粂さんが言ったように、バランスをとって研究・発信を進めることが大切だと思います。

（金）　私の趣旨も粂さんの考えに近いです。われわれのコンセプトとしては「各論」ですよね。人文学はこうだというようなことを言う立場でもないし、というか言えないしね。どちらかというと私たちが今発見していることをもうちょっと掘り下げてみて、「こういう視点があるよ」ということを提示することが大事だと思います。

（大石）　私も皆さんと同じで、高尚ではないが、単なる発信だけでもないものにできたらいいなと思います。コミュニケーターという名前が付いているので、もう少し一方的でない形にはしていきたいなと。どうやったら面白いかとかやりやすいかなというのは、色々工夫したいですね。

（堀田）　人文知の危機についてはおいおい、色々な形で向き合うことになると思いますが、今は生活者の人たちが感じている何かにツンツンと触れられるような、そういう人文知のアプローチがしていけたらいいですね。

今後のテーマ：感染症による死とどう向き合うか

（金）　私が具体的に取り上げたいテーマの一つに医療人類学的な視点があります。今は、人間がまるで生物学的というか、医療的な存在として語られる風潮が強くなっていると思うんですね。いかに感染を防いで、いかに生物学的な命を維持す

るかが大事。もちろん、それはそうなんだけれども、同時に社会文化的な存在でもある人間が、この時代をいかに生き抜くかという視点が抜け落ちている気がします。ようやく「with コロナ」という言葉が出てきたましたが、どちらかというと経済活動が中心になっていて、現代の人間は生物学的か、経済的な存在でしかないのかと思うと、本当にモヤモヤしてしまいます。

私の研究テーマである死と葬儀という側面からみても、同じ現象が起きていて。少し説明させていただきますと、今の社会では臨終までの過程は医療化されていると言えるけど、一旦遺体が遺族や葬儀業者に渡ると、社会文化的な死の処理のプロセスへと移行します。しかしコロナによる遺体は、感染の危険性が残っているという理由で、医療的な存在としてあり続けないといけなくなっている。ということは、これまでの社会文化的な死との向き合い方は許されないわけです。

（堀田） 遺体と対面できない、灰になった状態で帰ってくる、亡くなった方が使っていた物も燃やさなければならないという、常時では起こり得なかった死との付き合い方が現れていますよね。コロナは生活のあらゆる側面と関連していて、それが文化的なこと、例えば最期のお別れに顔を見ることができないという事態に及んで、逆にこれまで日本人がいかにそれに重きを置いてきたかが立ち現れている。

（河合） 日本古代・中世は、死は穢（けがれ）を招くとされ、家族であっても死に目にあえないことがありました。特に貴族層は、誰か死にそうになったらその場を離れて、別のところに行かないといけないこともありました。それにも関わらず、亡くなる妻を抱きかかえたままにしていた天皇もおり、それによって政治的なものが全部ストップする恐れがあったという話も残っています。やはり、いつの時代でも、大切な人の死に目にあえないということは辛いことだと思うんです。今回のコロナ問題を抱える私たちも、会いたいけど会えないという状況にいつ直面するか分からないわけですよね。そういう、死ぬ人を支えて最期まで見届けたいけどできないという葛藤は、前近代にもあったということをふと思いました。

（金） 古代や中世においていかに死に対処してきたのか、また文学作品には伝染病による死がいかに描かれているかなどにもとても興味があるので、人文知コミュニケーター同士の学際的な企画として展開していけたら面白そうですね。河合さんの話はケガレとハレというところにつながると思うんですが、これは医療とは一見異なるものに聞こえても、どちらも一つの世界観だというふうに捉えれば、同じレベルで解釈することもできます。

今後のテーマ：食とコロナ

（河合） 最近、体に付いたウイルスがお風呂で流されるとか、お風呂に入ることで免疫力が上がるとかという噂がありますよね。

（金） やっぱり？韓国だったら、キムチを食べるから免疫力が高いんだと言っているのと同じだ。

（堀田） SARS の時にもその噂が広まりましたよね。発酵食品のキムチを食べているから、韓国人は SARS にかからないと。モンゴルで流されたキムチの CM でも、SARS にならないと宣伝したものだから、「どれどれ」といってキムチにはまったモンゴル人が続出したという。だから、食文化を変える可能性すら孕んでいるんですよ。

（金） ああ、キムチナショナリズムの恐ろしさ。そういえば 3.11 の後、韓国にいる母は私に大量の昆布を送り付けてきました。昆布が放射性物質を分解するとか。

（粂） 私は今回アオサに騙されました。

（河合） レシピというのは、普通の料理だけじゃなくて、何かを治すという意味もありますよね。薬としての食というテーマも面白いと思います。一方で、食におけるジェンダー的役割とそれによる差別という問題も出てくるかもしれない。そういう意味で、食は色々と展開可能な題材だと思います。

（金） ちょっと話が変わりますが、地球研では食というテーマを以前から扱っていて、持続可能な食の生産と消費に関する研究プロジェクト FEAST（https://www.feastproject.org）もあります。ここの研究者たちはローカルな農業と流通システムの重要性をずっと前から認識して研究してきているんですが、こんなにも移動が制限されて、限られた資源の中でやりくりしないといけなくなると、その大事さを改めて実感しますよね。

しかし個人的に注意を払わないといけないなと思うのは、キムチナショナリズムじゃないですけど、ローカルがいつの間にかナショナルにすり替わることです。コロナで、良くも悪くも国家の存在感が増してきていますが、この最中で「ローカル＝国産」となってしまうと、こぼれ落ちることがたくさんあるだろうという気がする。例えば 3.11 の時に「がんばれ東北」が「がんばれ日本」になって、私は「日本人」じゃないから頑張らなくていいのかと思ったんですが、それと似たような状況にはなってほしくないですね。なので、あまりフラットな議論に止まらないといいなと、今の状況をみて思っています。

（河合） 歴史を見ると、日本人は米ばかり食べていたわけではなくて色々な穀物を食べていたのに、そういう事実がいつの間にかあやふやになり、主食＝米というイメージが強くなった点も興味深いんです。また、「日本」ではなくて地方の事象だったことも、金さんが言ったように、いつの間にか「国家」のことにすり替えられることもありますよね。そういう誤解により、現在の国と国の仲が悪くなったり、国境が閉ざされたりするのは非常に怖いと思う。食というテーマの中に、そういうシリアスな課題があってもいいかもしれない。

今後のテーマ：現代日本社会の不確実性に対する脆弱さ

（堀田） 私はずっとモンゴルの遊牧民と生活してきたので、今の日本社会を遊牧社会と比較してしまうんです。で、「何と脆弱かな」というのが正直な感想です。大石さんが満面の笑顔で同意してくれていますけど。というのは、遊牧とはそもそも不確実性を生きるということなんですね。今日、家畜を 1000 頭持っていても、一晩寝たら雪害になって全部失うかもしれない。そういうことが日常なわけです。「明日が今日と同じと思うなよ」ということをみんなわかった上で、それでも普通に生きていく。

一方で都市化とは、不確実性をいかに少なくするかということの極みだと思うんです。明日も同じ時間に電車が来る、職場があるという当たり前さを今まで疑ったことがなかった人たちがこんなにたくさんいた、ということに驚きました。私は「明日から家で仕事をしなさい」と言われても全然ストレスではなくて、そうなったらそうなった時のベストを尽くせばいいやと思うんですが、これは多分遊牧民譲りなんでしょうね。もし彼らだったら、こんなパニックにはならずに淡々と次の道を探すだろうなと思って。もちろん人によって色々な状況がありますけど、ちょっと家に閉じ込められたぐらいで家族を殴ったり、なぜそういうことになるのかなと。だから、私が伝えたいと思ったのは、世界中にはいろんな形で不確実な世界を生きている人たちがいるので、もっと生き方を相対化してほしいということです。

（金） 遊牧民社会といったら、侑香ちゃんからも聞きたい。

（大石） 私も深く同意します。シベリアの人々の感覚だと、明日トナカイが全部死ぬというのもあり得るので。そうなったらなったで、彼らは遊牧だけじゃなくて漁撈も狩猟採集もやっているので、食べていけると思います。そういった柔軟さが彼らの生きる術なんです。

（堀田） そうなんです。だから、家畜が死んだら慌てるのではなくて、「死んだな」と。そしたら、首都に移住しようか、それとも海外に出稼ぎに行こうかといって、次の生きるための工作が始まっていくんです。草原の様子が良くなって「これなら家畜をまた増やせるな」と思ったら、また草原に帰ってきて遊牧をする。生きるための手段は一つではなくて、これをやってみて駄目だったらあれ、というような感じで、幾つも幾つも種を持っておく。その種は何かというと、人、人脈なんです。普段から常に家畜を失うかもしれないという危機感がどこかにあるから、人との出会いをすごく大事にする。いざという時にはちゃんとコネクションとして使えるように生存戦略を図っているんですよね。日本人はもうちょっと生存戦略について、真剣に考えた方がいいと思いました。

（金） われわれは他のところに委ねてしまっているということかな。何か確固たる社会システムを作り上げて、個々人はあまり考えなくなった。しかしそれが崩れたらパニックになってしまったということだと思う。

（堀田） そう。だから、今回は亡くなっている人もいらっしゃるので慎重に言葉を選ばないといけませんが、ある意味チャンスだと思うんです。もう一回、自分がどこに立っていて、どうやって生きていこうと考えているのかを、真剣に考え直せるいいチャンスなのではないかと。なので、テレビに出てくる学者たちが「経済活動を元の状態に戻すには、あと何年かかる」などと言うのを聞くと、なぜ元に戻らないといけないのかと思う。何を悲観しているのかと。明日の可能性はどちらの方向にでも広がっているのに、元に戻そう、今までの路線に乗せようとする無駄な努力をしないでほしいなと。その力があるなら、もうちょっと見たことのない未来を考えられるかなと思います。

（大石） 未来の話が出たんですが、私も挙げたかったトピックです。私は自分の生活にあまり関心がないのか、新聞もテレビもあまり見ていないし、買いだめもしていない。だいたい絵を描いたり、縄跳びをしたりと、ファンタジーの世界をいきているんです。こういう私が挙げてみたいのが SF です。ディストピアの SF だと、大きな外敵が来て、それに対して国家や大きな機関が対応するんですけど、そのうち国家や大きな機関がどんどん権力を握って管理社会ができていく。これが、コロナ感染拡大防止対策として、外出自粛や休業要請をして人間の行動や生き方を制限したり管理したりしていくのと似ているなと。そういうことを「エヴァンゲリオン」を見ながら思っていました。また、今は新しい生活に慣れていって、新しい社会システムをつくる方向に切り替わっていく時期なので、人文学の視点から、人間の未来への想像力について考えてみるのもいいんじゃないかなと思います。

今後のテーマ：ポストコロナ社会へ～戻る、戻れない、戻りたくない～

（河合） 日本は 3.11 を経験し、今の都市生活が実は不安定なものであると実感した人も多くいたと思います。逆にそれがトラウマになっているところもあるかもしれません。それで今回のウイルス感染などの未知のものにガーンとアタックされると、便利な都市生活に、以前の「現状」に戻れないかもしれないという不安が強まることはあるのかな。どうなんだろう。アメリカでも日本と同じように「前の時点に戻れない」ということが話題にはなっているので、「前に戻りたい」という意識はみんなにあるのだと、私は理解しています。

（堀田） 多分、「戻りたい」というのを多数の選択肢の中から選んでいるのではなくて、そもそも一択なんだと思うんですよ。自分が知っている世界がそれだから、それに戻ることがベストなのだと、比較対照せずにそう思っているだけだと思いますね。

（河合） そうですね。あともう一つ、前に戻りたくない人もいるはずなんですよね。今までずっと抑えられてきた人たち。例えば現在アメリカの 20 ～ 30 代の若者は、大学に行くために学生ローンをしなくてはいけないケースが多いのに、学費は上がり続けているので、大きな社会問題になっています。また、私たちのような人文学者、例えば歴史学で学位を取った人の中には、ずっと頑張ってきたけどなかなか定職に就けない傾向が続いています。アメリカには、ホームレス問題や人種差別問題もあります。今まで大きな声を上げてこなかった人たちが今の混乱の中で活動を起こしていくのではないかと思ったり。今までたまってきた色々な不満が爆発する可能性はあるかもしれない。

（金） 戻りたくないというので思ったのですけど、在宅勤務ができる状況は、私はすごく快適で。

（河合） 確かに、仕事がはかどる面もありますよね。でも、やはり家ではできないことも多いし、寂しいです。微妙。

（金） コミュニケーションを取るためにはある程度職場にも行きたいんですけどね。でも、明らかに本を書いたり記事を書くに当たっては、家でやる方が集中できる。あと、他の機関はどうかわからないけど、文書も結構電子化してきて、それも嬉しいなと思っています。戻りたくない側面は確かにありますよね。コロナで、10 年ぐらいかかることが一気に進んだみたいな。でも、それをどう記事にできるのか。

（堀田） そこなんですよ。われわれ研究者のように、もともと引きこもって物を書いたりするのが得意な人たちは、在宅勤務にあまり不便を感じないと思うけど、それは多分特殊な一部の人たちです。外で働かざるを得ない時給労働の人たちに、「何も身を切っていないではないか」と思われがちな研究者が書くことに、どれだけ共感してもらえるだろうかと。おそらく記事を読む時間すらないと思うんです。だから、われわれはそういう特殊な立場からこの連載を書いているんだということは肝に銘じておかないと。

（金） 私はそういう問題も扱うべきだと思うけど、そういう人たちに申し訳ないから特定の問題を取り上げないというのも、おかしいと思う。なぜなら、私たちのように在宅でできる仕事は結構あるだろうし、それぞれの仕事が各自の方向で進展するのは、別に罪ではないと思うから。

（堀田）では、われわれはこの特殊な状況に特化できる体質だから、これを機会にどんどん質の高い
ものを発信していけばいいということですね。

今後のテーマ：コロナ事態で浮き彫りになる社会関係のあり方

（大石） もう一つ、私がテーマとして挙げたいのが人間関係です。コロナで人との距離や人間関係も変わってきていますよね。外出自粛により家にいる時間が長くなって家族関係が変わったり、オンラインのコミュニケーションが盛んになったりしていると、よく報道されていますよね。しかしそれだけじゃなくて、人間関係には衛生観念も関係していると思います。個人的な判断で「ここは汚い」、「ここは大丈夫」というグループ分けをしていて、それが人に対してまで広がっている。つまり、個人的な衛生観で他者に対する距離を決めていて、それがたとえば移住労働者や留学生、県外の人、医療従事者に対する偏見や差別を生んでいると思います。こうした個人の、非常に細かなグループ分けと不衛生のラベル貼りが人々の間である程度共有されると、より大きな差別に繋がるんじゃないかと思っています。自分も例外ではなくて、これまでは何とも思わなかったのに、頭では偏見だとわかっているのに、いつの間にか人と距離をとってしまっている自分を発見したりします。

（金） 同感です。コロナが人間関係、その中でも特に否定的な側面を鮮明にさせていますよね。今、私は韓国の大邱・慶尚北道地域で調査をしているんですけど、

ここは宗教団体を中心に多くの感染者が出たところなんです。政治的には保守党の畑だし、社会関係のあり方においても保守的な雰囲気が色濃く残っている地域として、有名。韓国では、出身地域や政治的立場によっては、この地域に対立的な姿勢をとる人も多いんですね。この根深い地域対立の構造が今回のコロナ事態で露わになっているというか、より強化されているなと思う節があって。感染者が多く発生した原因が、彼らの地域性にあるとバッシングするとか。

（河合）　金さんがおっしゃったように、地域や政治的グループ別でもそういうことはあるだろうし、社会経済的、あるいはジェンダー格差による理由で不利な立場にあったマイノリティの人たちが、今回のコロナ事態でより不利な立場になりつつあることは取り上げるべきだと思います。日本でも韓国でもアメリカでもそういうことはたくさん起きている。でもその一方で、今回の連載では、ポジティブな現象も取り上げたい。コロナ事態によって「ありがたい」、「すごく大切だ」と実感できたことを取り上げて、前向きになるきっかけを皆さんにお届けできたらいいなと思います。

　それプラス、色々な力関係のバランスが崩れて、今後の国際情勢がどうなっていくのかも気になります。歴史学を勉強してきた立場からは、戦争が起こるのが一番心配なんですけれども。私がそれをどこまで記事にできるかは不明なのですけど、取り上げたいテーマですね。

（金）　マイノリティという話が出ましたが、コロナ事態で外国人差別もより明らかになっていますよね。例えば、中長期滞在ビザを持っていて、日本に仕事も生活基盤もある外国人が、実質、日本から出られない状況になっています。というのも、4 月 3 日付で、一度コロナで危険な地域に出国したら、日本への上陸（再入国）が拒否されるようになったんですね。これは感染防止のためには当たり前に見えるかもしれないけど、2 週間隔離や検査という措置をすれば、日本人も日本滞在の外国人も同じはずなんですよね。先ほどの大石さんの話しのように、これは「他者は危ない」という感覚からきていると思います。混乱した状況で、頭じゃなくて体で考えてしまうというか。
私自身、中長期滞在ビザを持って日本で生活している外国籍の人間でして、実家は韓国になるんですが、日本でかれこれ 10 年以上暮らしています。夫と、夫側の家族は日本籍ですし、研究や仕事の基盤も日本で築いてきたので、一度出国したら戻ってこられない状況は本当に辛いです。万が一、韓国の身内に何かあっても戻れないというのも怖いんですが（5 月 27 日付で、人道上配慮すべき事情があるときなどは、個別の事情に応じて再入国を許可することが明記された　http://www.moj.go.jp/content/001321919.pdf）、ひょっとしたら研究の機会を失う可能性だってあります。フィールドワークや、重要な国際学会などに外国人だけが行けなくなってしまうと、日本では公平に研究する、働く権利が保障されないという話になると思うんですよね。私の配属機関である地球研は外国籍の研究者が多いので、研究活動に大きな支障が出てきそうです。
私は人間文化研究機構の研究者で、公務員のような安定的な立場ですが、もっと弱い立場の人はたくさんいるはず。他者に対する線引きとか差別は日本だけじゃなくて、これから色んなところで問題になってくると思います。

今後のテーマ：噂

（条）　皆さんのテーマのつながりで何となく言い出せなかったのですけど。すごく壮大なテーマで。

（金）　行き過ぎたかな？

（条）　いえいえ。私の興味は本当に低俗で、こういう社会の混乱における人の噂の力が気になっています。例えば、最初の頃はお湯を飲むとコロナ菌の予防につながるという情報が出回ったりしましたよね。あとは先ほども話しましたけどアオサがいいという噂があって、私はまんまと信じてしまいました。噂による混乱の中で、思いがけず価値が上がり、市場で売りさばかれたものが日々ある。例えば昨日のニュースだと、野菜の売れ行きがいいと。売れ行きがいいので白菜や大根が高いという。要は家族で集う時間が長いので、鍋物を食べる回数が多くなって、それで高騰しているという話でした。つまり、混乱の中で広まる噂があり、それをきっかけに爆発的に売れるものがあるという、人の生活に合わせて変化していく事柄が、私は面白いと思います。例えば「同じような現象が昔もありました。江戸時代の書物を見てみましょう」という企画をやってみたら、意外に今の生活に潤いが出る人もいるかもしれないし、それを糸口に研究の世界にはまる人もいるかもしれない。これまで人文知を全く知らなかった人が、ちょっとこのサイトもお気に入り登録してみようとなるかもしれない。そういう種まきのような記事を書いてみてもいいと思うんです。そのいい例がアマビエで、そんなに厄払いなどに興味がなかった人がそこから興味を持ってくれるとか、これを機会に人文知の魅力を伝えて、過去の人間の営みに興味を抱いてもらうコンテンツもあっていいかなと思っています。
ちょっとアマビエの説明をしますと、妖怪のアマビエというのがいて、その画像がお守りになると話題になり、和菓子屋さんがそれをモデルにお菓子を作ったりしています。私はよく手芸をするんですが、手芸を趣味にしている人の Twitter などをみていると、アマビエの人形を作った人の投稿が相次いでいます。あとは最近新聞で目にしたものでは、「ビックリマンチョコ」のシールの作者がそれを使って製品化したとか（「朝日新聞」2020 年 04 月 27 日夕刊）、アマビエブームがすごく渦巻いているんです。私はそういう不思議な文化現象を面白いと思いました。
なので、このコーナーで扱うテーマも、在宅勤務など、読者層のことを考えたらセンシティブな話題になるようなものもあれば、私が今話したように「そんなこともあるよね」という身近なトピック立てまで、色々な話題があってもいいと思うのです。

（金）　私も最初はそういうアプローチをと思っていたのですが、なぜか話がこういう方向に進んできてしまいました。流行るものというのは人類学的にも面白いと思う。呪術に近いではないですか。

（堀田）　かつ、物質文化でもいけそうですね。アマビエの展開も物質文化として他の地域と比較することもできるし、時代的に比較することもできると思う。危機に直面した時にどんなふうに象徴にすがっていくかということもみえるだろうし。色々な角度から切れるのではないかと思います。

人文学研究者がコロナ時代にできること

（金）　私は条さんがおっしゃったようなことを最初にイメージしていたんですよ。噂や呪術といった具体的なテーマから、色々な研究者と対談したり、自分の研究を披露したりしながら、もっと深くて新しい視点を提示していく。でも、今回のわれわれの議論は、いつの間にかよりセンシティブな方向に流れていった。私はこれ自体も大事なことで、コロナ事態にあたっての人文学の役割というのを象徴している気がします。つまり、コロナに関しては、優雅な話ばかりではないということなんでしょうか。これはこの企画の全体的な方向性にも関わる問題で、社会的にセンシティブな問題をあえて取り上げないのは、今の社会から目を逸らすことにもなると思います。

（条）　人文学は優雅に研究をしていて、直接社会の役に立たないという見方もあるけれども、逆に長い目で、冷静に、色々な文化現象を分析できるという利点もあると思います。堀田さんと大石さんのように民族学を研究されている方が同じような思いを抱えていたということがわかっただけでもなるほどと思えるように、同じような声をかき集めて記事にすることで、今起きている社会現象を冷静に分析できるという利点もあると思うのです。私が持っていたモヤモヤした気持ちを、他にも持っている人がいたということが、色々な人の共感と安心につながればいいなと思います。

　そういう点で人文学は、歴史の積み重ねとか、色々な国で起きている文化現象を用例として並べて提示できるので、優雅というか、長い目と広い視野で分析が

できる学問だというふうにみてはどうかと思いました。

（金）　確かにそういう人文学の役割は大事だけど、ちょっと引っ掛かったのは、冷徹、冷静に分析するのが人文学なのかなというところです。人文学は日常に根差しているというか、研究対象と自分を完全に切り離して分析対象にするような学問ではないと、私の研究分野からすると思うんです。もちろん粂さんがそういう意図でおっしゃってはないと思いますけど。

　そこで大事なのは、最初の企画趣旨に戻ってしまいますが、私たちは分析者であるだけでなく、この社会の一部、一人の生活者であるという視点を常に意識することだと改めて思いました。自分の経験、自分が考えたことから研究の方へ展開していく方が人間味があるし、人文学的でもあるのかなという気がします。

（大石）　私もテーマとしてSFの管理社会と人間関係、差別などを挙げたのですが、そんなに壮大なことは考えていません。私の想像ですけれども、研究者たちはこういう事態だからこそ自分の研究を丁寧にやることが大事だと思っている気がします。だから、私が作りたい記事の内容は、それぞれの研究者が地道に積み重ねてきた研究から、コロナの状況に関して言えること、言いたいことです。あるいは連想的な事柄でもいいかなと思っています。コロナ関連の事象に対する直接的な意見とか、主張とか、そういったことはあまり考えていなかったです。

（堀田）　今の大石さんの話を聞いていて、本当にそうだなと思ったんですけど、研究者はみんなある意味、謙虚ですよね。自分の専門でなかったら「コロナのことなんてわからない」となってしまうと思うんですが、「あなたが今やっている研究は何ですか」と聞いたら、意識の奥でコロナに結び付いた何かを抽出できそうな気がしますね。

　ざっくばらんな話し合いの中、ここで取り上げたテーマ以外にも「お風呂とコロナ」、「人間と動物の関係」などが話題に上がりました。こうしたテーマについても発信していく予定です。また、今回の座談会を通して、研究分野や対象によって人文知コミュニケーターもそれぞれ考え方が少しずつ異なっていることが見えてきました。このような多様性を活かしたわれわれの試行錯誤を、温かく見守っていただければ幸いです。